

達人の作法

時計修理職人

ながはま おさむ
永浜 修さん
(69)

◆略歴 1944年、兵庫県生まれ。62年に大阪市立生野工業高校の時計・計器科を卒業、永浜時計店の4代目に。73年に29歳で1級時計修理技能士になった。厚生労働省が卓越した技能者を表彰する「現代の名工」に選ばれている。

◆好きな言葉 想いをつなぐ

約1000個の部品は、それぞれ扱い方が違う。直径が0・1ミリより小さいものもあり、顕微鏡やルーペを使わないよう、道具の手入れは欠かせず、毎朝必ず専用の砥石などで研ぐ。「見えない部分だからこそ大切にしたい」

部品を組み立て直した後、最後の難関が「1秒」を正確に合わせる作業だ。歯車の小さな力を伝えていくための微調整が必要で、それだけで最低2日を要する。「時間をたっぷりかけてでも、きちっと直す」。家族の形見、就職記念など「1000の時計があれば1000の思いがある」。再び時を刻み始めた喜びを共有することが何よりも楽しい。



修理の依頼があれば進んで引き受ける永浜さん。「限りなく生まれた時の状態に戻す」のが信条だ(兵庫県姫路市)＝奥村宗洋撮影

ミクロの「手当て」命宿す

10年ほど前。40歳代の女性が、交通事故で亡くなった妹の時計を持ってきた。30年ほど前のクォーツ式のセイコ製で、身に付けていたが故障してしまった。修理をお願いするに、腕時計の部品も壊れて、代わりの部品もない。「無理ですね」と言う中、女性は肩を落とした。

「不思議な感覚にとらわれたことが幾度もある。創業116年の老舗時計店の4代目だ。物心ついた頃には、時計職人だった父親のひざに座り、時計に触れていた。工業高校の恩師は「ただ時計を直すだけの職人ではなく、時計のすべてを知って手当てする人」と導いてくれた。

修理した時計を返す時には、分解前や修理後の時計の写真、故障の原因やどう直したかなどを書いた手紙を添えている。

95年の阪神・淡路大震災で、兵庫県芦屋市内にあった姉の自宅が全壊した。駆けつけたが、人影はない。絶望して隣の空き地に座り込んだ。数時間後、西宮市内の親戚宅で再会できた。がれきに埋もれていて、見ず知らずの男性に助け出されたという。「社会に何か恩返しをしたい」と生き方を見直す機会になった。

「約50年培ってきた技術を出し切ってお役に立つ。信頼を寄せてもらえれば、これほど幸せなことはない」。店で一緒に働く次男の恵悟さん(45)も、そんな父の背中を見つめている。(白植正一)

見えない部分だからこそ大切にしたい

「お家芸」技能五輪で復活

日本時計協会によると、2012年の腕時計の国内市場(推定)は前年比18%増の5281億円だった。このうちスイス製など輸入品が全体の約8割を占めている。09年はリーマン・ショックで落ち込んだが、景気回復に伴って10年から3年連続で伸びた。近年は高級機械式時計も人気という。

一方で、時計の修理職人は高齢化が進んでいる。そのため、若い技術者を育成する機運が盛り上がっている。12年に長野県で開かれた「技能五輪全国大会」(対

象は23歳以下)では24年ぶりに「時計修理」が参考種目として復活し、14年には正式種目になる予定だ。「若い人に目標を持ってもらい、より高い技術を継承する意欲を持ってほしい」(同協会)と期待する。

かつて日本のお家芸だった時計の技術をどう守っていくか。永浜さんも05年に兵庫県時計技能士会を作り、小中学生を対象とした「出前授業」を始めると、ものづくりの面白さを伝える活動を行っている。